

カツオ資源調査・保全分科会 平成30年度（第1回）

日 時：平成30年5月21日（月）12：30～14：00

場 所：高知大学地域連携推進センター2階セミナー室

出席者：受田座長、山崎副座長、千頭副座長、市川（事務局）他 資料：参加者リスト

議事録

（1）座長挨拶

昨年度に引き続き、資源調査・保全分科会を開催する。

座長は今年度も高知大学の受田、副座長は山崎技研の山崎会長、チカミミルテックの千頭社長となる。

オブザーバーとして地域協働学部4年の藤井くらはら学生。カツオ県民会議の取り組みを卒論の題材とする。

（2）平成30年度事業計画

資料1に基づいて説明。幹事会レベルでは(案)の取れている資料である。

今年度スケジュールの各日程の内容および会場は、参加者の意見をいただきながら流動的に設定していく。

（3）講演：「ゆずロードの取り組み紹介」

高知大学 地域連携推進センター 准教授 赤池慎吾 先生

（日本遺産ゆずロード地域プロデューサー）

【概略】資料2に基づいて説明

（日本遺産とはどのようなものか）

- ・日本遺産とは何か特定の文化財や技術ではなくストーリーを文化庁が認定するもの。地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的とするもの。どう保護するか、ではなく、どう活用するか。
- ・ストーリーによるパッケージ化と地域全体としての一体的な整備・活用、そして国内外への戦略的・効果的な発信が必要。
- ・審査において、ストーリー、ビジョン、体制の3つが審査される。審査員の目にかかるストーリーを描くことが強く求められる。
- ・ストーリーとしては、当該地域の際立った特徴・特色を示すものであるとともに、わが国の魅力を十分に伝えるものとなっている必要がある。単に地域の歴史や文化財の価値を解説するだけになっていないことが重要。
- ・出せるストーリーは一本だけ。見開き2ページ内で全て書ききる。
- ・ビジョンは中長期的（20～30年）な見地に立ったあるべき姿を記載すること。
- ・体制としては、どこが事務局を担うかも大事だが、「プロジェクトリーダーがいること」、「行政でなく民間主体の推進体制であること（重要）」、「実行部隊としてワーキンググループがあるこ

と」、「行政とグループリーダーの意見交換がきちんと行われること」、これらが申請の段階で取り組まれていること。

- ・ 認定率はおよそ2割。平成30年度の応募件数はこれまでと変わらないが認定件数は少なくなる見込み。
- ・ 認定によるメリットとして、3年間で約7,000万円（定額）の補助金交付がある。人材育成や情報発信など様々に使える。また、文化庁が国内外への情報発信を行う。旅行会社の商品化も増える。日本遺産と関係して中芸で6社の旅行商品が作られた。平成29年の入込客数は前年比6.2%増となった。また、認定は地域の誇りやアイデンティティーが醸成されるきっかけにもなる。

(中芸における申請に向けた取組)

- ・ 事務局を安田町に置き、ストーリー部会でストーリー作成を高知大学が担当。
- ・ 住民ワークショップにより地域資源のリストアップと分類。住民は一つ一つの地域資源への思い入れは極めて強いが、地域資源と地域資源の連続性や関係性はあまり意識されていない。そのため地域全体を通すテーマが生まれにくかった。
- ・ 申請前の文化庁との事前相談

1回目（2016年8月）

「環と和：魚梁瀬森林鉄道の環状線路が生み出した柚夫の文化と町民文化の調和」

文化庁：タイトルにストーリーが表現されているか？日本全国の他の町民文化と何が違うのか？人が来たくなる今の魅力が表れているタイトルか？

2回目（2016年10月）

「まぼろしの魚梁瀬森林鉄道で巡る海・山・川の暮らしにちりばめられた南国土佐のおきゃく文化」ほか8本

文化庁：今の魅力がない。「まぼろし」や「ちりばめられた」のような抽象的な言葉ではなく、今体験できるものを。

3回目（2016年11月）

「客人をもてなす「おきゃく」の文化：魚梁瀬森林鉄道を巡る交流が育んだ中芸の饗宴の作法」

文化庁：おきゃくはストーリーの主役にはならない。起承転結の転。地域のコミュニティにとって大事だろうが、イベントでもなければ外の人に来て実際に体験できる魅力ではないのでは。おきゃくは高知県の文化であって中芸ではない。中芸にしかないものは何なのか。

4回目（2016年12月）

「りんてつの里からユズの町へ：日本一のユズと魚梁瀬森林鉄道遺構が織り成す中芸の歴史・景観・文化」

文化庁：魚梁瀬が読めない。読めないものがタイトルにあるのは好ましくない。林業から柚子へのつながりが見えにくい。

文化庁申請（2017年1月）

「森林鉄道から日本一のゆずロードへ：ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化」

(まとめ)

- ・〇〇がすごい！△△の歴史的価値があるだけでダメ。地域全体の魅力は伝わらない。
- ・突き詰めれば、どんな地域もオンリーワン。でも、外の人が魅力を感じるかどうかは違う。
- ・高知県とも違う、隣の町とも違うものは何か。
- ・いま体験できる地域の魅力を考え、それにあつた地域資源を考える。つまり、何があるかからではなく、何が体験できるかから考える。
- ・地域側の知識や想いと、よそ者の視点や感性の2つの視点が必要。

【質疑応答・意見交換】

- ・日本遺産への申請に関して、当分科会で取り上げていく。県からも支援を頂きつつ、当分科会の中にワーキンググループを立ち上げて日本遺産申請に向けた実質的な議論をスタートさせていく考えである。ワーキングを県民会議としてどのように体制強化していくか、立ち上がり次第、関係の皆様と協議する。日本遺産への申請母体は協議会ではなく自治体であることから、当分科会から生まれたワーキングに自治体が申請母体として参画していただく体制としたい。
- ・赤池先生の取組は旅行会社による観光商品開発のようにも感じるが、それが必要であるなら観光の専門家もワーキングに必要ではないか。
- ・現在の日本遺産も観光をかなり意識したものもある。そういった場合、最終的な受け皿がDMOになる。観光については自立する組織も含めて考えねばならない。
- ・観光としての対外的活用も大事だが、もう一方で内部的な見方もある。地元の認知度が向上したかどうかなど、KPIを設定して評価されることもある。地元が誰も知らないものは論外。
- ・世界中で最もカツオを食べているのが高知県民であることにスポットを当てるか。県民会議としてはカツオ資源の枯渇化を問題視しており、海との関わり方に対するムーブメントを起こそうとしている。ムーブメント自体も日本遺産申請にあたっての売りになるかどうか。
- ・食の視点以外にも、カツオを取り巻く人の文化や営みなどを表現することも大事であり、それを今体験できる何かに結びつけることが必要。
- ・漁業大国であった日本は世界中で海洋資源の採取を続け、このまま続けば大問題になるとの反省から、持続的な海との関わり方を考えなければならない。パラダイム転換に基づくムーブメントを文化としてどのように表現できるか。
- ・中芸の例で言えば、食品としてのユズの価値だけでなく、ユズによる景観も新たな価値として構築したいと考えている。カツオに関しても食べるだけではない価値も生まれるのではないか。
- ・WCPFCに行く際にも日本の取組として重要な要素。
- ・中土佐町には国選定の文化的景観として久礼の漁港がある。須崎市にある鳴無神社も国の重要文化財として文化庁からアドバイスいただいている。あるいは高知市のひろめ市場も重要な食文化の拠点といえる。こういったところを繋ぐこと。
- ・出航前に奥さんが手を合わせに行くような祈りの場はあるか。かつて青柳裕介先生の漫画の中で描写があった。拝む意味では、双名島に観音様、弁天様が祀られており、大型カツオ船が出航する際にはここを2回回って出て行く風習がある。祈りも一つのコンテンツになる。そうい

- った有形無形の文化財を、日本各地の事例と差別化しながらストーリーとして描くことが必要。
- ・民間主体の体制であることが重要。中芸の例では住民や民間組織が役割をもって一緒に推進したことが評価された。結局、自走できるかどうかが重要であることから、例えば外部コンサルに頼って見映えの良い申請書が出来ても、民間主体の自走体制が不十分であればプレゼンの場で露見する。

(4) その他

- ・高知城歴史博物館で「日本の文化講座」が開講する。年間テーマとして「土佐の海・鯉」で4回開催。第1回は5月26日(土)、渡部淳館長を講師として「土佐人と海」。資料は日本遺産のストーリーの題材に使えるかもしれない。渡部館長に県民会議から誰か出席の上ご挨拶した方がよい。出席する人は事務局にご一報いただきたい。
- ・日本カツオ学会が東京海洋大学を会場として7月7日(土)に「平成30年度カツオセミナー」を開催する。県民会議の動きも紹介する。

3. 次回の分科会の日程について

- ・次回日程は7月10日(火)を予定している。
- ・7月10日に先立って高知にて茨城大学の二平先生によるペンシルカツオの講演をいただく検討もあるが日程が未定であることから、7月10日に先立って二平先生の講演が調整されなかった場合は、福田記者に話題提供としてお願いしたい。
- ・3回目以降は内容未定だが、一度、山崎会長のもとで宇佐の現場を9月にて考えたい。
- ・次回7月までの間にワーキングを立ち上げたい。メンバーは申請に向けて色々な方にお声掛けするので、観光関係も含めて検討する。